

葬送行列の意味するもの（その二）

和田 謙 寿

—

胡弓・喇叭・小太鼓などの不協和音に合わせて葬送の儀礼が行われている。家庭によっては数人から成る楽隊で構成せられていた場合もある。みな同色の薄青の洋服を着用している。ここ台中での片田舎の出棺前の風景である。

台湾をはじめとした東南アジアの田舎部での華僑たちの葬礼のその多くは、道士によって行われる場合が多い。もちろん、立派な盛大な葬式になると何組かの楽隊（吹奏楽）が知人、縁者たちによって寄付せられる。丁度日本の葬式で花輪などを届けられるのと同様である。日本においても昔より全国的に地域の講中の人たちによって、鉦・太鼓・饒鉞などを鳴らしながら墓地に向ったが、その目的は前者と機を一つにするものであろう。

都市部に行くと葬儀の司祭者は道士に代って仏僧に増えて

行く傾向がある。日本人から見ると、その葬送儀礼の厳粛にして複雑な習俗には時間的錯覚を覚ゆる。とくに台南地方の如く、古来からの仕来りを固く守っている地域においては、学ぶべき点が非常に多い。

長時間続いた葬送の儀式もいよいよ大詰を迎え、棺前に数人の縁の強い若者たちが集まり、お茶碗に酒を注いで「水盃の儀」が行われる。一番前に位置している女性がマイクをとって大声で涙を浮かべながら叫び声を発した。

「あなたはなぜ、私たちを残してこの世を去ったのですか。……私はこの上なく淋しい。……くやしい……私たちには今日から大きな悩みが襲ってくる……私はそれが恐ろしい」同時に周囲の女たちも同調して「わーっ」と声をあげて泣き出す。この、あわれみの声と言うよりも、自己のやるせない不満を訴える声に周囲は異様な雰囲気なたなびく。この泣き声に引かれて近親者の男性たちも泣き出す。彼女たちの服装は、

頭に白布をまとい背の下までたれ下っている。額の部分には赤色の布地がはりつけてあるが、これは故人との関係度合を示したものである。喪衣⁽¹⁾を孝服⁽²⁾と言ひ、麻（麻布）・苧（苧麻布）・浅（浅黄布）・黄（黄布）・紅（赤布）・白（白布）等があつて家族の親族等によつて種々異っている。つまり、葬衣は麻衣を以つて縫合させたもので、故人に近い者ほどその布地は粗^あくなつてゐる。

葬送儀礼に参加している近親者は昔日の故儀にのつとつて、おもむろな態度をもつて事に臨んでいる。たとえば、葬事に参加する人たちの多くは手をうしろに組むなどして他意の無い事を表現するが如きである。とくにここでの女性の号泣⁽²⁾は葬送のクライマックスを象徴するものである。この号泣⁽²⁾の習俗こそ仏教の葬儀における引導以前の（わが国に仏教が伝来せぬ以前、これが引導に代るべきものであつたと言ひ）厳肅なる仕草と見られたのである。

元来、道士の行ひ葬送儀礼には、表現を赤裸々に示し庶民的な態度をとるが故か号泣する場面も多く見受けられるが、時代の進展による庶民感情の推移により最近では昔日に比して大部変化してきた。古来、号泣をすると言ひ事は死者に対する唯一なる慰めの一つとして、また、葬式の盛大さを表現するものとして歓迎視せられていたのである。しかるに仏教の僧侶たちは、死者のそばで、余りにも号泣する事は未練が

残り死者が安心してあの世に行けぬとして号泣の風を指導している。

元来、葬送儀礼を盛大にして多くの人たちが立会つてくれる事は施主たちにとつては一番誇とするところであつた。親の威光と子供たちの出世、家の発展、これらの事項は葬式を通じ、そのパロメーターとして現わされる。道士による葬送はこの点を十分配慮するかのように行われる。道士の姿は仏僧と変るところがないので一般の素人にはその区別がつきにくい。しかし彼等の住居は仏僧が寺院と名づけられるところに対して「壇」と言ひ名称がつけられている。つまり、「天道壇」と言ひが如きである。ただ、彼等の服装をよく見るとき、導師をつとめる者の中に地藏帽的なものをつけている事によつて見分ける事が出来る。経典は弥陀経関係のものを誦読しているが、一般の人たちには、仏・道の区別はなかなかつきにくい。ただ仏僧の場合に比して道士の動作はキラピヤカで作動的である。葬送の中でたまたま道士の踊り出す風景を見受けられるのもその一面を現わしている。扇や紙軸を持ち、衣の長い袖をなびかせながら、個人、または数人の道士が参列者を前にして円陣をつくつて、すいすいと舞う姿は無念の舞と言ひるか、葬送の効果を盛り上げるには十分な演出ぶりである。道士の行ひ葬送の中には時折アトラクションが行われる。葬送中のアトラクション、葬送に参加した者

たちの前で一輪車に乗ったり、唐傘の上に火玉をのせたり、足で傘をくるくると回したり、松明をお手玉の如く、ぐるぐる繰り合わせたりして大衆を喜ばせる。一種の軽業である。

近隣の人たちの話によると、「より、ニギヤカな葬式をするために、人集めのためにするのだ」と言う。その費用は故人の子供たちや近親者の人たちが出資するのである。オハヤシが加わることもある。時には、「葬送の舞」が行われることもあった。台湾南部の高雄、この大きなレストランで食事を取りながら舞踊を觀賞した事がある。その時、舞姫による葬送の舞を始めて見た。果して葬送儀礼とはどんな関係にあるものなのか、私には不思議に感じられた。その後数日して台中の葬式に参加した際この場面にふれる事が出来た。リヤカーに乗せた移動式のマイクとテープレコーダーの中に葬送向のテープを入れ、音楽を大きく流しながら、それに合わせて数名の舞姫が大きなポーズをとって踊り回るのである。派手やかな白、緑、黒、青、などの洋服を着用し、手には、ハンカチやセンス、ウチワなどを持って音楽に合わせて舞うのである。そこには男性の（女性の場合もある）歌手もつく。やはり葬送の盛大さを願うと共に、他方、死者の霊に対する願いも共存するかのように見られる。彼女等による「舞の舞台」となるところは位置的には葬送会場の近く、やがて出棺の際、棺の安置せられる行列の起点において行われる。葬式

葬送行列の意味するもの（和田）

の儀礼は道士や仏僧以外に俗人の黒衣を身につけた幾人かの男女も読経をし行持が進行せられる。出棺に当り喪主は葬場より、やがて棺の安置されているところに動物の如く膝にて這いながら近づき釘打ちの儀が行われる。これを「封釘」と言う（四つの角の釘四本は長い鉄釘を打つ。若し死者が母である時は外戚の人が打つ。封釘する時は縁起のよい言葉を言うならわしになっていく。封釘した人には赤い包にて金銭を礼としてわたす）。

親族の人たちは泣きながらその動作を見守り、棺を中心に三匝または七匝をして行列につく。この場面は日本の出棺時習俗とよく似ている点が多い。道士が冠る三番叟のような帽子が印象深く目につく。施主の持つ位牌をはじめとして、血縁者、近親者とそれぞれ写真、ユデ玉子の入った線香炉、小竹に吊された旗、杖なども持って歩く。位牌はそのまま持つ場合もあれば、筒状の五升柩の中に入れて持ち歩く場合もある。時には天秤棒を入れ傘をさしながら柩を持つ。（一般には五升柩の中に、五穀豊穰を願うために五穀の種子と男子が生まれるようにと鉄釘（釘は丁に通じ男の意）、更に財宝を得るために、平年は十二文、閏年には十三文を入れる。五升柩の下には日の丸型の赤紙を置き、太陽にあやかり葬式の日が吉日になる事を現わす。不吉日の日なればこれを置かない）台湾のみでなく、シンガポール、マレーシア、タイ国の華僑の葬送においても同様な風俗が見られるのは実に印象深く察せられ

る。柩に五穀を入れるのは目に見えぬ多くの邪霊を避け、祀ることにより故人の威大なる靈力によって五穀を中心とした功德にあやかろうとするためである。勿論、この香炉の中にユデたまごを入れ線香を立てるのは、生たまごでないユデたまごは孵化しない。つまり二度と生まれ変わる事がないと言う鉄則より、幽霊のこの世への再来を防いだものであり、五升柩中の天秤は目に見える邪霊の再来を天秤の棒によって破滅せんとしたものだと言われる。

二

傘を葬送時、または行列の時にさす風習は東南アジア（サラワク・バリ島・台湾）等のみではなく、日本においても古来より行われてきたところの仕来りである。日本においても斯かる風習のあった事は文献などを通じて知る事が出来るが、その古きものは編笠をもって古型のものと考えられる。『石川県(5)の金沢地方での葬列中には「傘持」の役のあった事が知られているし』

。九州福岡県「男の場合、親子、兄弟の間柄にあった者は編笠を冠った」(6)

。高知県長岡地方「墓上に菅笠を置いた」(7)

。栃木県「施主は編笠をかぶり、草履を座敷で履いて出る」(8)

。山梨県山梨市下石森「葬列に参加する際、太陽にさらされ



台湾の台中における葬送、野辺送りの風景
傘をさし円形の柩を持つ。柩の持主は葬主、中には位牌や穀物等が入っている。

ないように編笠を冠ると言うが、この笠のことを忌中笠と呼ぶ。このような直接の陽光を避ける風習は他の地方にもある」

。東京都離島・青ヶ島⁽¹⁰⁾「昔は雨が降る降らないにかかわらず傘をさしたという」

。沖繩『出棺時⁽¹¹⁾には自宅から火葬場まで、「雨傘の一番上の所に白い細い紙を差し込み」仏の出たことの確認と葬儀を取り行ったものとの世間へ印象を与えるものの、そしていま火葬にむかう新仏である証拠とでも言うものだろうか、火葬場へ到着するまで、この傘を持つことになるし、また、もし徒歩で火葬場へ向かう場合には傘を開いて葬列をつくり、村落の地区長とか自治会の長老格の指揮者によって進行する』

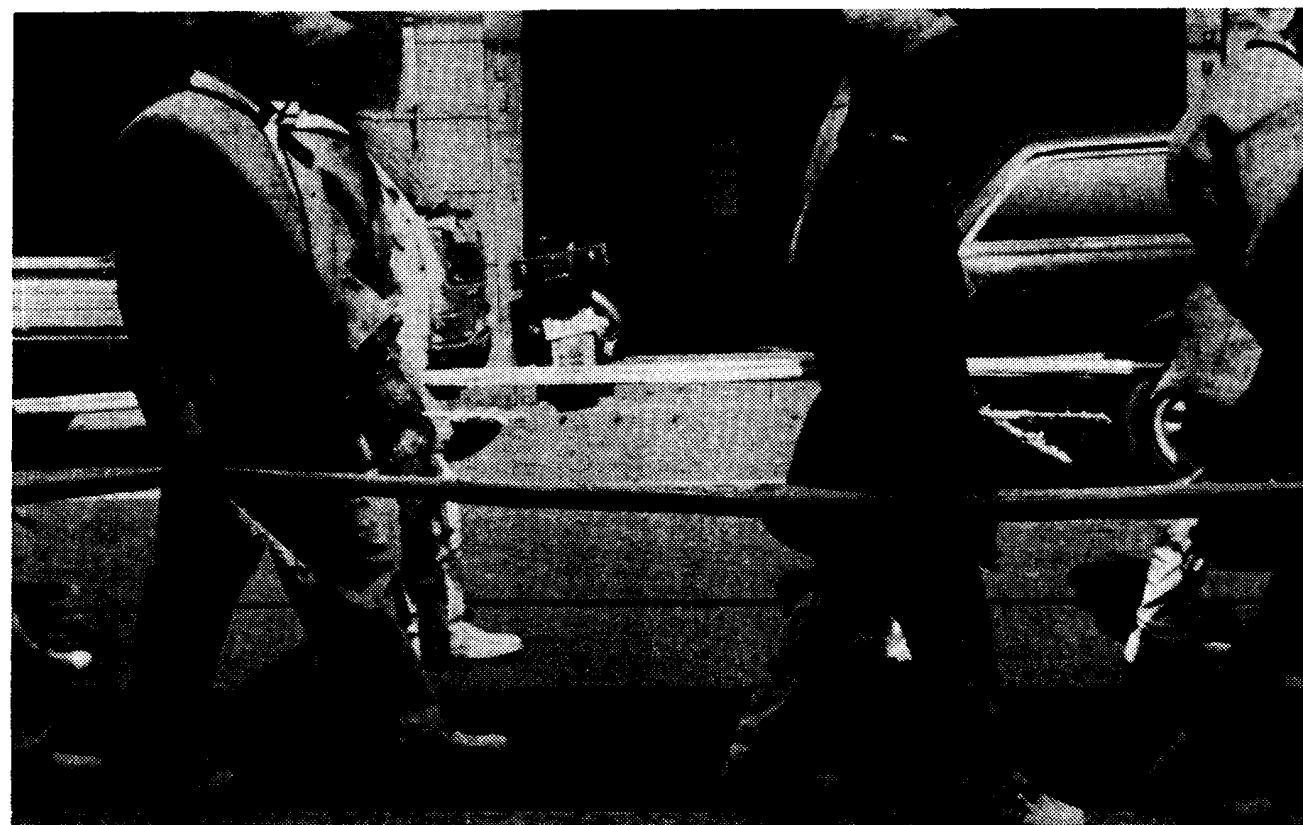
沖繩の場合での葬送と傘との関連については、多少、解説が与えられているが、傘に対する説話は意外に伝播してると考えられる。要約するところ、「太陽の直接の光と熱とをさえぎる事によって、悪霊を鎮めんと欲する」ところのものであり、同時に東南アジアの如き暑い地方では、棺の上を傘で覆われる事もあるので、防暑の意も含まれているものと考えられる。

三

杖は棺の中に収められるものと、棺外に葬送儀礼に用いられるものとの二者がある。つまり、葬列に参加するもの、墓前に挿されるものなど、その必要性に応じて利用せられる。台中での出棺時に用いられていた杖は、手を白紙で巻いた二十センチからなる儀礼用としての退化した杖であった。台南の大きな葬式で見られた杖も棒状の十五センチ内外の同様なものであった。

棺の前後に晒^{さらし}でつくられた善の綱があり、参列者はその布につかまって二列になって歩いていたが、片手に小さな棒を持って目についた。この棒こそ、杖の退化したものであり、葬送習俗の上で貴重な役割を示しているものと考えられた。

元来杖は、老人や病者の身体を助くる器具として用いられると共に、精神的には禅杖（警策）の如き修行的なもの、孕^{はら}みた棒や魔法としての杖などの如き呪術的なもの、告人^{つげと}の代理としての人間役的なもの、催眠術の如く催眠状態を導入するための器具としても、その多方面にわたって大きな役割を果たしてきたのである。日本における葬送の習俗でも、山桐・梅の小技⁽¹²⁾・桑の棒の如き自然植物を切り出し、実用になし得ぬ名ばかりの杖を利用している点、台湾等の場合と考え方が



台湾の台南における葬送行列の風景。善の綱を握り、手には赤い提灯と白紙に巻いた杖を持っている。杖は葬具の一つとして大きな意味をもつ。

共通している。

台湾の葬送における女性の役割は意外に大きいが、婦人の参列者の少ない時は杖をつく事によって婦人が参加した事と見做している場合がある。日本の寺への死者の知らせ、つまり告人が二人で行けない時には、杖をついて行く事によって、二人して行く代行者と認められたのである。杖と葬送についての伝承は全国的なものではあるが。

。北海道のアイヌ部落⁽¹³⁾「葬列はまず墓標の打ち込む方を先にしたものを持った人。片手に杖をついて容器に入れた水を運ぶ女……」

。静岡県浜松地方⁽¹⁴⁾「埋めた上に墓標と杖を立て……膳をあげ、そして線香を立てる。北部の山地では鎌を立てるところもある」

。愛媛県東宇和郡⁽¹⁵⁾「墓の上に草履と杖を立てる」

。徳島県阿南市⁽¹⁶⁾「婦人が喪服にて竹に小さな藁草履を付けた杖をついて歩む」

。高知県豊町⁽¹⁷⁾「笠・杖・草履は死者が冥土へ赴くために必要なものだといひ、身近な者が墓地まで持参する。杖はマゴツエともいい、孫が持参するところが多い」

。山口県豊北町⁽¹⁸⁾「杖引きは青竹を割って、それに白布を巻いた杖をもつ親族の最年長の男二人がこれに当る」

その他、徳の島等、多目的な姿で紹介されている。

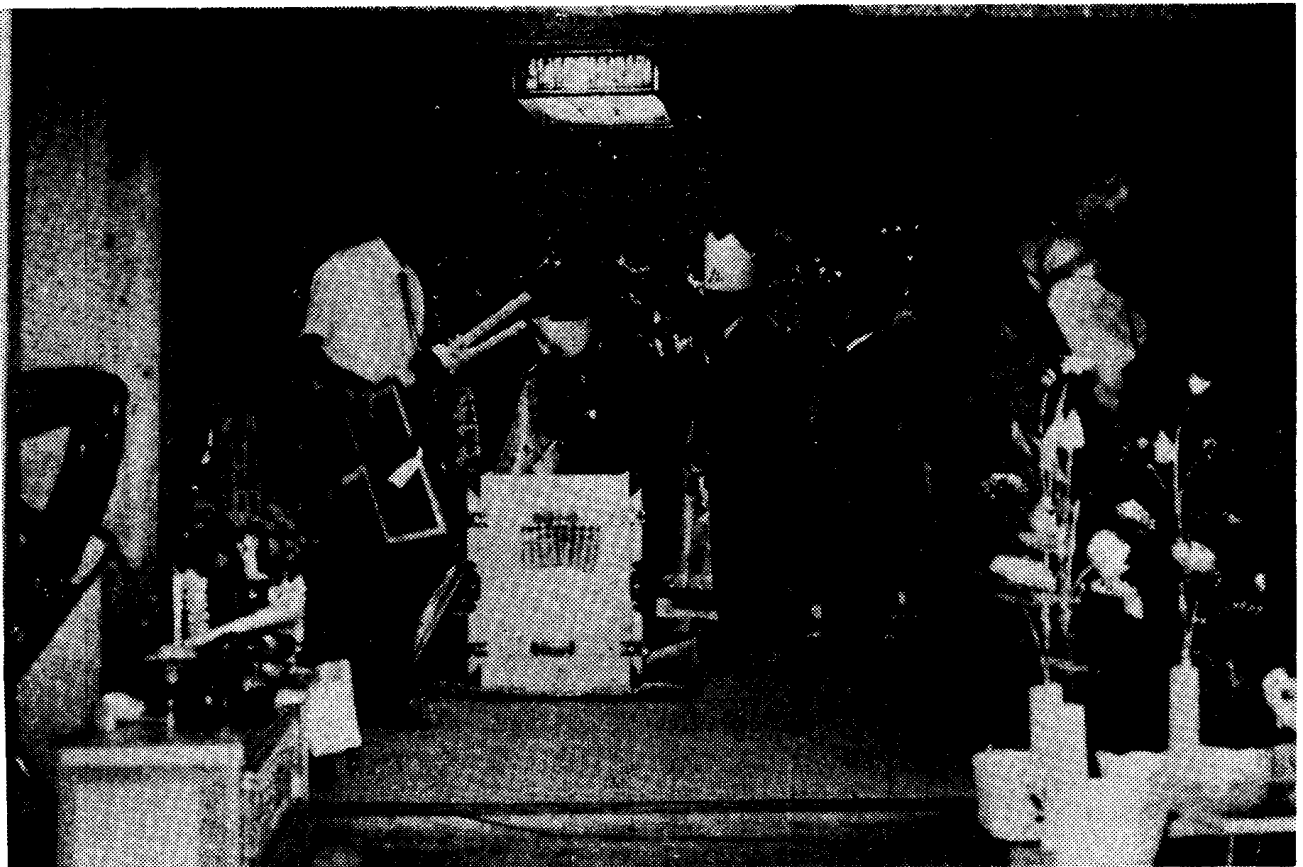
葬送行事に見受けられる習俗の一つに「三角の紙に梵字を書いたものを額に付ける風習がある」。これも昔日においては日本の各地に見られた習俗であったが、現在ではその分布も大変少なくなった。この成立と因縁説話については、拙著「仏教の地域発展」⁽¹⁹⁾中に述べているところであるが、別名「三角布」または「ホウカン」とも呼ばれている。江戸期の幽霊画の多くは、決まって額に「ホウカン」が描かれている。愛知県⁽²⁰⁾「特定の人のみ(あるいは全員)が額に半紙、または晒布を三角に折り麻紐で付けたところもある。豊田市の地方ではこれを『ホウカン』という」。

徳島県⁽²¹⁾「位牌持ち、棺かつぎ、天蓋持ちは頭に三角の白紙を巻きつけ、アシナカソウリ(足半)を履き、この役を務めた者は特に重い忌服の義務がある」。

香川県⁽²²⁾「ホウカン」と呼ばれる三角の紙を頭につける人は身内の男で、羽織、袴で位牌を持つ人、棺を担ぐ人である」。

その他、斯かる習俗に関連したものとしては、京都市の竹野郡や大阪府の河内長野市等より「ホウカン」という名称のもとに紹介せられている。国外的にもこれによく似た習俗を、台湾、インドネシアのバリ島等でも見受けられたが、鉢巻と語りべき範疇のものであった。ただし、どこの国に訪ずれても、葬送の際には特定の帽子や鉢巻をする風習が至って多い

葬送行列の意味するもの(和田)



長野県諏訪近郊での葬式のひとこまである。近親者はホウカン(宝冠)をつけている。



台湾南部の潮州の広東部落の葬送風景。出棺後、葬列を辻々に時折休め、知人等の焼香を受ける。

事を明記したい。

四

葬式の盛大さを引立させるものつまり、誇らせるものは、なんとと言っても葬列の如何にある。葬列の中で、また、ひときわ目立つものは「善の綱」であろう。善の綱の名前はところにより種々の名称で呼ばれているが、漢字で書かれるよりも、むしろ、カタカナで表現されている場合が多く、それだけに一般民衆の間に馴染まれていく事がよくわかる。

「善の綱」は女性専用の如く思われているけれども、必ずしも昔日においてはそうではなかった。中華民国などにおいても男女の別なくその風習は至って強い。「善の綱」が「縁の綱」と呼ばれる由縁の如く、これはもともと葬式のものではなく、御開帳の例にあるように、逆に仏像信仰より導入されたものなのであった。この風習はビルマやタイ国などの間にも厚く残っている。ここに、日本における善の綱に対する由来についてを、二、三紹介する事にしよう。

。高知県土佐清水市「名残の綱は棺の中央を縛った綱から前後につける晒布で、ゼンノツナ・トモツナ・ナゴリノツナ・ナゴレノツナ、などと呼ばれる。孫、兄弟などの肉親が持つ。六〇歳以上の死者の場合は前に、六〇歳未満の場合には後へ引くものが多い。土佐清水では配



台湾の台南市においての盛大な葬送風景。大勢の人たちが善の綱を引く。

偶者が先に死亡していれば前へ、生存している時は後へ引くものだという」

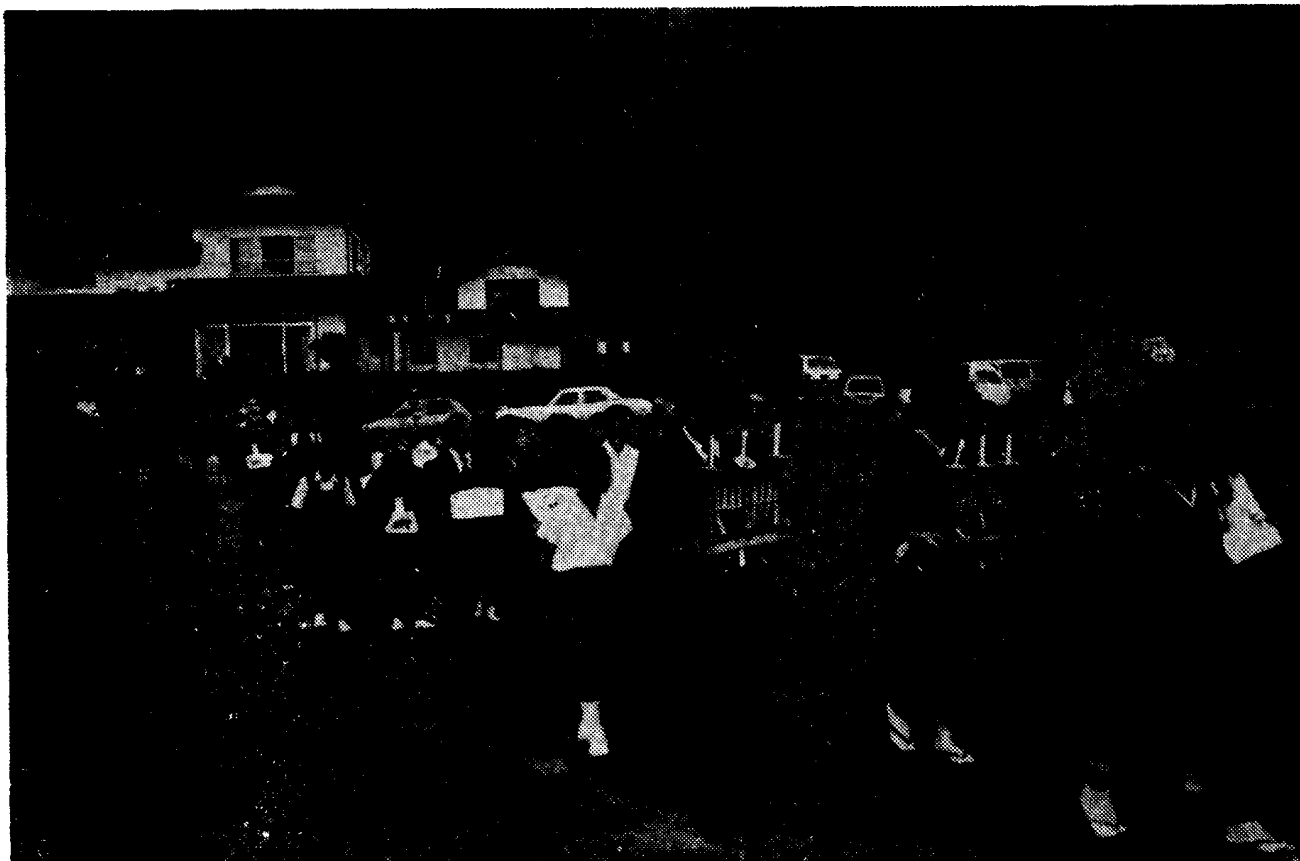
。宮崎県⁽²⁴⁾「惜しみ綱とよばれ、白木綿の布を長くして棺の後方に結び、家族、親族の女で血縁の近い者ほど綱の前方に場所をとって行列した。惜しみ綱をとる者は女性のみであった。そして葬儀終了後は棺と共に埋めたり、穴掘りに提供したりした」

。山口県萩市⁽²⁵⁾「善の綱、前の綱は早くあの世へ行けるように、後の綱は、やがてくる永劫の別れを惜しんで引止めておきたいという心意のあらわれだと言える」

。福岡県大島⁽²⁶⁾「ゼンノ綱を引くのは女で、各人金銭を白紙に包んで結びつける。このゼンの綱を引く女はみな精進齋に結ったらしい。のち、近親者に限られるようになった」

。「この綱の事を、オシンツナ・チカラツナなどとも呼ぶが、みんな意義ある名称と言える」「長寿を全うした人の綱は関係者が喜んで貰った。長寿にあやかるうとしたからである」

。東京都青ヶ島⁽²⁷⁾「ゼンノツナは棺の前方に引くので二十反ほど必要である。これは寺に保存されていて、会葬者は片手でこれを握って墓地に行くが、これに手をふれると七日間の忌に服さなければならぬので、野辺送りを見る人たちはつとめてこれにさわらないとした」



長野県中部の山村部落での葬送風景



台湾の台中，山村部落での葬送風景

かように「善の綱」は各地で各様の解釈がこころみられたのである。

台南の葬送に際し、「善の綱」の由来について土地の老婆に質問したところ、「葬送に参加するということは、これほど別れのつらいことはない。しぜん涙があふれ出て、すなおに歩くこと（葬列に参加する）が出来ない。そこで綱につかまりつつ歩いて行けば無事に墓地に到達することが出来る。昔の人たちは実によいことを考えたものだ。これこそ真の生活より生じた知恵なのだ」と、話してくれた。台湾の葬送儀礼の中でその重要な行事の部分に、死者と参列者とを結び、その紐を包丁で切断する儀式がある。これは道士または仏僧によって行われるところであるが、この世とあの世との縁を切る。死者と残れる人たちの真の別れを如実に物語っているものである。先述した御開帳の如く仏像の指先と回向塔とを結んだ布綱につかまりながら、信者たちが手沿いに参拝するものである。つまりこのような立場より生ずると思われる「縁の綱」的な考え方よりも一段と真に迫ったものと考えられる。縁の綱という、なんとなく宗教的（仏教的）な感覚がするが、善の綱となると庶民的な雰囲気漂う。更に惜しみ綱という名称になるに及び、故人をしのぶその純粋なる心情の発露と受けとる事が出来る。

棺をもとにして前と後に結ばれた一筋の綱と布が、地域性

葬送行列の意味するもの（和田）

や時代性によって種々なる波紋を投げかけたのである。台南地方においては、嘗つて中国において行われたと同様な儀礼に残ると思われる葬列等の習俗が今もなお踏襲されている。

註

- (1) 鈴木清一郎「台湾の冠婚葬祭」昭和九年十二月、台湾日日新聞社発行 二六〇頁
- (2) 五来重「先祖供養と葬送儀礼」昭和六十年十月、大法輪選書 二十一頁
- (3) 鈴木清一郎「台湾の冠婚葬祭」二三七頁
- (4) 右同 二四五頁
- (5) 今村充夫「北中部の葬送墓制」昭和五十四年三月 明玄書房発行 七十四頁
- (6) 中村正夫「九州の葬送墓制」昭和五十四年四月 右同 三十四頁
- (7) 坂本正夫「四国の葬送墓制」昭和五十四年七月 右同 一五八頁
- (8) 日向野徳久「関東の葬送墓制」昭和五十四年三月 右同 五十九頁
- (9) 「日本の葬送儀礼」新潟の昔 昭和五十年十二月 式典新聞編集部発行
- (10) 直江広治・古家信平「関東の葬送墓制」昭和五十四年三月 明玄書房発行 三十三頁
- (11) 「日本の葬送儀礼」沖繩 昭和五十年十二月 式典新聞編集部発行 五二四頁

- (12) 井之口章次「日本の葬式」一九六五年 早川書房発行 百頁
- (13) 「日本の葬送儀礼」アイヌ 昭和五十年十二月 式典新聞編集部発行 一七八頁
- (14) 飯尾哲爾「日本の葬式慣習」昭和八年十二月 一誠社発行 九十七頁
- (15) 森正史「四国の葬送墓制」昭和五十四年七月 明玄書房発行 九十六頁
- (16) 伊川公司「西郊民俗」第二卷 昭和五十九年五月 図書刊行会発行 七七六頁
- (17) 坂本正夫「四国の葬送墓制」昭和五十四年七月 明玄書房発行 一五七頁
- (18) 伊藤彰「中国の葬送墓制」昭和五十四年三月 右同 八十七頁
- (19) 和田謙寿「仏教の地域発展」昭和五十三年三月 仏教民俗研究会発行 三五〇頁
- (20) 森谷周野「南中部の葬送墓制」昭和五十四年三月 明玄書房発行 一七三頁
- (21) 「日本の葬送儀礼」徳島県 昭和五十年十二月 式典新聞編集部発行 二二七頁
- (22) 市原輝士「四国の葬送墓制」昭和五十四年七月 明玄書房発行 五十九頁
- (23) 坂本正夫「四国の葬送墓制」右同 一五七頁
- (24) 田中熊雄「九州の葬送墓制」昭和五十四年四月 右同 二七〇頁
- (25) 伊藤彰「中国の葬送墓制」昭和五十四年三月 右同 八十八頁
- (26) 中村正夫「九州の葬送墓制」昭和五十四年四月 右同 三十四頁
- (27) 古江広治・古家信平「関東の葬送墓制」昭和五十四年三月 右同 二四九頁